

現行民法典を創った人びと（16）査定委員11・12・13：大岡育造・都筑馨六・関直彦、外伝12：坂本龍馬と現行民法典の起草者たち

七戸，克彦
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/18805>

出版情報：法学セミナー．55（8），pp.64-67，2010-08-01．日本評論社
バージョン：
権利関係：



現行民法典を創った人びと [16]

九州大学教授 七戸克彦

法学セミナー
2010/08/no.668

1 | 大岡育造 (硯海) は、第1回総選挙より13回当選の衆議院議員、立憲政友会の創設に関与し、3度の衆議院議長¹⁾の在職期間は平成20年河野洋平に抜かれるまで歴代1位 (1785日)、第1次山本権兵衛内閣の文部大臣にもなった超大物であるが、なぜか「研究書は見あたらず……未研究の政治家である²⁾」。

安政3年6月3日、医師・大岡尚斎の長男として山口県下長門国豊浦郡小串村に生まれた彼は、家業の医師を志して明治6年長崎医学校に入りドイツ学と漢学を学ぶが、明治7年台湾出兵に伴い同校は廃校、法律政治への転向を決意し両親の反対を押し切って上京するも、脚気に罹患し医師の勧めで埼玉県にて療養。快癒後は県下の小学校学校教諭となるが、同県布達が県下教員千余名の利害に関わるとして、教員の代理人として県令・白根多助を相手に東京上等裁判所に出席。だが、この訴訟は仲裁により解決。その経験から、ますます法律の重要性を感じた彼は、教職を辞して再び東京に戻り講法学会に学ぶ。このほか司法省法学校にも通ったとする文献も多いが、裏付けが取れない (明治10年募集の速成科1期生 (51名)

のうち、氏名不詳の途中退学者4名中の1人か)³⁾。

2 | 明治12年12月25日代言人免許を取得した彼は⁴⁾、母校・講法学会の幹事となるが、その専横を嫌った学生らは、同校講師を務めた岸本辰雄・宮城浩蔵らに新たな学校開設を懇請。その結果生まれたのが明治法律学校であったから、大岡なくして現在の明治大学はなかったともいえる。他方、大岡も共立学校⁵⁾の幹事に転じ (明治15年には校長)、また世論社を興して東京世論新誌を発行。政治的には、嚶鳴社・沼間守一の幕下であったが、明治14年10月自由党入党。

もっとも、東京代言人組合では沼間の実弟・高梨哲四郎と親しく、明治14年3月14日付東京日日新聞の代言人侮辱の社説「健訟ノ弊風ヲ矯正スヘシ」に対する東京組合所属代言人らの名誉回復訴訟では、日報社 (社長・福地源一郎) の訴訟代理人になった高梨を擁護⁶⁾、元田肇と大谷木備一郎の会長争いに端を発する明治22年の東京組合代言人会の分裂の際にも、高梨哲四郎・

角田眞平・岡山兼吉・渋谷健爾らとともに大谷木の新組合設立に参画。一方、代言人としての大岡の名声は、明治15年発生の大阪事件で、翌16年7月9日わが国初の正当防衛による無罪判決を得て大いに高まり⁷⁾、明治17年の秩父事件、明治19年のノルマントン号事件、明治20年の花井梅屋殺害事件、明治24～27年世間を騒がせた相馬家騒動などで活躍。

3 | 明治18年12月～23年2月東京府議会議員、明治23年6月には江戸新聞を買収して東京中新聞、8月には中央新聞と改め社主となる。また同年7月の第1回衆議院総選挙で山口3区より当選 (無所属)、第2回総選挙では中央交渉部、第3回総選挙では国民協会、第4回総選挙で落選するも、第5回総選挙で返り咲く。

出身地の関係から井上馨と近く、また明治31年第2次伊藤博文内閣瓦解後清国漫遊に出た伊藤の随員として同行、明治33年元田肇らとともに伊藤の立憲政友会創立に参加し、翌34年総務委員。以後は元田とともに政友会に重きをなし、第28議会 (明治44年12月～大正元年8月)、第29～31議会 (大正元年8月～3年3月)、第39～42議会 (大正6年6月～9年2月)

の衆議院議長を務める。なお、その間の3年間のブランクは、大正3年3～4月第1次山本権兵衛内閣の文部大臣の後、第2次大隈重信内閣時代の大正4年第12回総選挙で落選したためである。

[査定委員①]



大岡育造

おおおか・いくぞう (1856-1928)
『日本人物情報体系(24)』(皓星社、2000年)より。

- 1) 伊藤隆=季武嘉也 (編)『近現代日本人物資料情報辞典2』(吉川弘文館、2005年) 43頁 [戸島昭]。
- 2) 鈴木正裕『近代民事訴訟法史・日本2』(有斐閣、2006年) 66頁注 (64) 参照。なお、『明治宝鑑 (全)』(明治25年) 192頁には、「明治8年東京ニ出テ博士ボアソナード氏ニ從ヒ法律ノ蓄養ヲ究ム」とある。
- 3) 奥平昌洪『日本弁護士史』(有斐閣、1914年) 439頁。ただし、同書巻末「代言人免許一覧表」1386頁には明治13年免許とあり、同年説に立つ文献も多い。
- 4) 明治4年佐野鼎らが創設した英語学校。佐野の死後、明治11年高橋是清が校長になって以降は、東京大学予備門進学のための受験予備校として発展。現在の開成高校である。
- 5) 同事件については、奥平・前掲注3) 342頁以下参照。
- 6) 同事件については、奥平・前掲注3) 435頁以下参照。

1 | 都筑馨六は文久元年2月17日生まれ。高崎藩領内稲荷台の名主・藤井安右衛門(安治)の二男。幼くして西条藩士江戸詰・都筑辰之丞(侗忠)の養子となる。明治4年啓行堂(翌5年修文館と改称)に入りブラウンの下で英語を学び、7年カロールザル英学塾時代に受洗、翌8年開成学校に入学。開成学校時代は「シャベリ」の1位、「増長の甚しき人」の2位、「浴室にて騒ぐ人」の3位⁷⁾。明治10年東京大学文学部(政治理財学専攻)に進学。同期は末岡精一・坪井九馬三・松田小次郎・嘉納治五郎・田中稲城と都筑の計6名。都筑と末岡は同級文科の2秀才と称され、明治14年卒業後文部省留学生に選ばれ翌15年渡欧。はじめ末岡は未来の行政官を嘱望され、都筑は東京大学教授候補者と目されていたが、留学中に立場が逆転し、明治19年の帰国後、末岡は法科大学教授となり、都筑は外務省に入省したことから、学友はこれを訝しんだ⁸⁾。

なお、末岡は、明治26年には憲法国法学第1講座担任となるが(第2講座担任は穂積八束)、翌27年結核で死去。留学前の周囲の予想通りなら、都筑が穂積八束とともに東大の憲法学を担っていたところである。もっとも、都筑の卓越した語学力は外務省向きで、すでに英語は堪能だったうえに、留学でドイツ語に熟達、さらにフランス語をも修得し、ほとんど母国語を話すのと等しく英独仏三国人と同時に会話するのに驚嘆したベルリン駐割特命全権公使・青木周蔵が、井上馨外相に推薦、帰国後の明治19年12月外務大臣秘書官となる。

2 | だが、翌20年9月鹿鳴館外交の失敗による井上の外相辞職に伴い12月非職。翌21年井上の配慮でフランス留学となるが、同船した田中館愛橘(土方寧と同期の文部省派遣留学)と神戸の送別会で深酒し、船に乗り損ねる。遅れてパリに到着した二人を出迎えたのが当時公使館書記官であった原敬で⁹⁾、22年原の帰国と入れ替わりに公使館書記官となり、山県有朋の自治制度視察に随行。仏・英・独・露・米の巡察中ほとんど一人で通訳をこなし、山県の信任を得て23年3月第1次山県内閣の総理大臣秘書官。続く松方正義内閣時代の明治25年5月21日には、井上馨の養女・光子¹⁰⁾と結婚し、第2次伊藤博文内閣で内務大臣に就任し

た井上の下で27年6月内務省土木局長から12月には内務大臣秘書官。他方、明治29年にはロシア皇帝ニコライ2世の戴冠式参列の山県特命全権大使に随行し、明治31年第2次山県内閣では外務次官、翌32年より貴族院議員(〜42年2月)。その一方で、明治33年には伊藤博文の立憲政友会の創立委員にも名を連ね(この党名は都筑の命名によるという)、翌34年第4次伊藤内閣崩壊後の伊藤の欧米巡遊にも随行、同年12月14日ボツダム離宮でドイツ皇帝ヴィルヘルム2世に謁見した折りには、流暢なドイツ語に「この地で勉強せられたか」との皇帝の問いに対し、「単に勉強した^{ばか}斗りでなく、既に再度迄拜謁の光栄を得ました」と応じた都筑に、皇帝は笑みを含んで「扱てこそ先刻から見た様な顔だと思ふて居た」と返したという¹¹⁾。

3 | 明治36年7月より枢密院書記官長、42年2月より枢密顧問官。才能・コネとも申し分ないのに、「晩年は余り栄えなかったのはお気の毒である」と南部甕男は語る¹²⁾。政友会も早々に退会しており、妻・光子とも岳父・井上馨の死の翌年(大正5年)に離別して、紅葉館の女中であった静子と再婚している。

4 | ドイツ留学時代は、田中正平・斯波淳六郎・井上哲次郎らと親しく、また外国人女性に異常にもてたようで、下宿先の娘は恋の病に伏し、ドイツ士官の妻に惚れられ後を追いかけられもした¹³⁾。山県伯のロシア行随行の件といい、森鷗外『舞姫』の太田豊太郎のモデルを法学分野から探したならば、真っ先に思い浮かぶのは彼である。

【査定委員⑫】



都筑馨六

つづき・けいろく (1861-1923)

【都筑馨六伝】(馨光会、1926年) 口絵写真真より。

- 7) 唐澤富太郎「貢進生——幕末維新期のエリートたち」『唐澤富太郎著作集(第4巻)』(ぎょうせい、1990年) 400頁「旧大学生特癖三対表(明治9年旧大学生撰)」。
- 8) 鳥谷部春汀『春汀全集・第1巻(明治人物月旦・政治家月旦)』(博文館、1909年) 623~624頁。
- 9) 原奎太郎(編)『原敬日記(第1巻・官界言論人)』(福村出版、1965年) 126頁「明治21年3月10日」条。
- 10) 光子は男爵・新田俊純の二女。明治15年9歳で井上馨の養女となる。都筑と結婚後はベルリンの井上勝之助(馨の長男)の許で修学し、19歳で結婚。
- 11) 伊藤博邦(監修)＝平塚篤(編)『伊藤博文秘録』(春秋社、1929年)「伊藤博文秘録附録」41〜42頁。
- 12) 法律新聞2144号(大正12年7月10日) 17頁。
- 13) 『男爵郷誠之助君伝』(郷男爵記念会、1943年) 175頁以下、187頁以下。

1 | 関直彦は、紀州藩士・関平兵衛の三男、安政4年7月16日和歌山生まれ。5歳で藩校・学習館に入り、蔭山某の漢学塾に学ぶ。維新後は城下・茶屋ノ町に三浦安が開いた漢学塾に寄宿し、岡崎邦輔¹⁴⁾と机を並べる。明治5年藩校が県立学校となり、慶応義塾出身の吉田政之丞・村井信晴の下で変則英語をともに学んだ鎌田英吉・谷井保が慶応義塾に進んだのに対し¹⁵⁾、関は小学校教員となる。だが、学業への思い断ち難く、明治7年大阪英語学校に入り、翌8年東京英語学校に転学、9年東京大学予備門から、11年東京大学法学部に進学、同期は土方寧・三崎亀之助・山田喜之助・砂川雄峻・渡辺安積ら、文学部には高田早苗・山田一郎・天野為之・市島謙吉・坪内雄蔵（逍遙）ら¹⁶⁾がいた。このうち、高田・天野・岡山・市島・砂川・山田喜之助・山田一郎の7名は小野梓の臨渡会に入って大隈重信の改進黨に与し、三崎と関は福地源一郎（桜痴）・丸山作樂らの帝政黨に属したが、高田によれば、「私は大学へ入ると間もなくどういうわけであったか、同学生の関直彦君と殊に親善な交際をした。或る時代には、坪内君、市島君およびその他の人々よりも寧ろ関君と親密な交際をしたのである」¹⁶⁾。

卒業試験最終日より病気になる、卒業は高田たちに1年遅れるが、関によれば、この療養中の時期に、鳩山和夫から福地の東京日日新聞（日報社）への入社を勧められたという。福地に見出された末松謙澄はすでに明治8年官途に就き、その後福地を補佐した海内果も郷里の富山・高岡での英学塾開校を企図したため、海内が鳩山に後任者の周旋を求めた、というのが¹⁷⁾、しかし、海内は前年（明治14年9月21日）32歳の若さで死亡しており、また鳩山も明治15年1月に東大を免職になっているから、この記憶談はかなり怪しい。ともあれ、彼は日本最初の大学卒の新聞記者となる。一方、彼は、三崎亀之助・渡辺安積と学術研究会なる団体を設立し、分担してオースチンの法理学講義を翻訳・講述。

2 | その後、明治18年英吉利法律学校の設立に際して講師に就任し、他方、東京専門学校でも講師を務める。また、同年には麹町区選出の東京府会議員にもなるが、翌19年井上馨外相・山県有朋内相の北海道視

察に随行して転機が訪れる。視察後の外相官邸での慰労会の際、井上・山県は福地社長に關の欧米派遣を提案、福地は逆らえず承諾し、關は欧米巡遊の途に就く。ところが、翌20年、第1次伊藤博文内閣が倒れ黒田清隆内閣に代わるや、事態は急変する。御用新聞である東京日日新聞への政府補助が中止となり、福地社長が経営困難の引責辞任に追い込まれたのである。後任には末松謙澄が適任とされたが、末松は就任を固辞したため、当時ウィーン滞在中の關が急遽呼び戻され、29歳の若さで日報社社長の座に据えられた。だが、不羈独立の旗幟を社に掲げた關は、明治25年井上馨の自治党への協力要請を拒否、辞職して弁護士に転じ、その後日報社の経営は伊東巳代治に移った。

3 | 一方、關は、同郷の陸奥宗光に従い出馬の明治31年の第1回総選挙以来衆議院議員当選10回。明治31年の憲政党分裂では憲政本党に投じ、明治43年立憲国民党、大正11年革新倶楽部と犬養毅とともに非政友会系の道を歩み、さらに大正14年治安維持法に賛成の犬養とも袂を分かって、昭和2年清瀬一郎らと革新党を結成。その間、大正12年には東京弁護士会会長。昭和2～9年貴族院勅撰議員。昭和8年の回顧録では「ナチスに非ざれば人に非ず、書を焼き儒を坑にする如き有様は、秦の始皇帝の暴政を現代に表現す。……我が国が此轍を踏まんとするが如きは頗る考へものなり」とまで書いているが¹⁸⁾、昭和7年には軍部との協力を標榜する国民同盟の結成に参加している。

〔査定委員⑬〕



関 直彦

せき・なおひこ（1857-1934）

『日本法曹人物辞典(1)』（ゆまに書房、1995年）より。

14) 陸奥宗光の従兄弟。陸奥に従い渡米してミシガン大学に学び、帰国後は衆議院議員。政友会の参謀として活躍し、大正14年加藤高明内閣の農林大臣。

15) 後に、鎌田は衆議院議員・慶応義塾長・貴族院議員・文部大臣・枢密顧問官、谷井は日本郵船の重役となる。

16) 高田早苗『半峰昔ばなし』（早稲田大学出版部、1927年）79頁。

17) 関直彦『七十七年の回顧』（三省堂、1933年）105～106頁。なお、海内の企図した英学校は、明治14年11月越中義塾の名称で設立、高岡で最初の中等学校で、その名の通り、慶応義塾をモデルとした英語教育を行ったが、明治17年9月閉鎖された。

18) 関・前掲注17）329頁。なお、326～327頁の大規模な伏せ字（「×××××」）にも注目（検閲か）。

現行民法典の起草者の中に坂本龍馬の暗殺犯がいる、と言ったら驚く人もいるかもしれないが、当時海援隊の副長格だった陸奥陽之助（後の「カミソリ陸奥」宗光）入手の情報である。

1 | いろは丸事件——事の発端は慶応3年4月23日（1867年5月26日）23時頃、場所は宮崎駿が「崖の上のポニョ」の構想を練った瀬の浦、伊予大洲藩所有・海援隊借用の蒸気船・いろは丸が紀州藩の明光丸と衝突し沈没。才谷梅太郎こと坂本龍馬は紀州藩に対し船舶ならびにミニエー銃400丁その他の積荷につき総額8万3526両198文の損害賠償を請求。実際には、いろは丸側にも過失があったのみならず、そもそも龍馬が主張するような銃器など積んでいなかったことが最近の潜水調査で判明している。だが、龍馬は「船を沈めたその償いは／金を取らずに国を取る」とのよさこい節で長崎中を街宣し、体面を気にした紀州藩は結局賠償に応ずる。当たり屋とまではいわないまでも、たちの悪いゆすりたかりである。昭和6年刊行の『南紀徳川史』ですら「近時坂本龍馬伝ト称スル如キ印本類世ニ出往々此事件ヲ掲ケ猥リニ臆断妄誕ヲ加ヘ全ク事実ヲ謬伝スルアリ」と憤慨し53頁にもわたって事実関係を詳述しているくらいだから²⁰⁾、まして当時の紀州藩は怒り心頭だったろう。

2 | 近江屋事件——だが、上記談判成立直後の慶応3年11月15日（1867年12月10日）龍馬は京都河原町蛸薬師の近江屋で暗殺される。直接の実行犯については今もって不明であるが、陸奥陽之助（宗光）は、いろは丸事件の遺恨による犯行で、黒幕は紀州藩周旋方・三浦休太郎との情報を得る。周旋方とは、京都に駐在して他藩との外交交渉を行った役職で、御三家の一・紀州藩の周旋方である三浦は、佐幕外交の中心人物として名が通っていた。

3 | 天満屋事件——慶応3年12月7日（1868年1月1日）陸奥海援隊は総勢16人で三浦の宿泊する京都六条油小路花屋町天満屋を急襲。宿には三浦のほか、同じく紀州藩周旋方の関甚之助や、当日いろは丸事件の賠償額減額交渉から戻ったばかりの三宅精一（榮充）²¹⁾がおり、護衛や新撰組から派遣された応援と酒を酌み交わしていたが、乱入した刺客は三宅の頬から顎

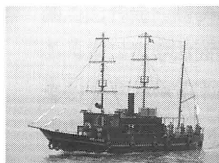
に一太刀浴せ、三浦も額に傷を受け、関は大小11か所に重傷を負った。なお、このとき三浦は燭台を蹴倒し闇に紛れて自ら「我コソ三浦ヲ討取りタリ」と叫んで難を逃れたともいわれるが、『南紀徳川史』の編者が直接三浦に質したところでは「全ク其事ナシ」との返答だったという²¹⁾。

4 | 明治維新——関甚之助は関直彦の長兄。翌慶応4年1月8日（1868年2月1日）の鳥羽伏見の戦いの際には1か月前の天満屋事件の傷が癒えず床にあったが、弟に命じて賊軍の敗兵の逃亡を助けた。維新後には和歌山藩の留め役（書記官）となったが、1年ならずして病に没する。佐幕派であっても「明治政府に仕へ、重用せられしもの少なからず、……長兄にして尚ほ存命せしならんには相当の地位にも上り、分相応の御奉公も出来しならんが、三十一歳にて逝きけるは誠に遺憾至極なり」と弟・直彦は慨嘆する²²⁾。

これに対し、同僚の三浦休太郎は同年（慶応4年）8月27日（1868年10月12日）京都に召喚され、明治改元（9月8日）後の12月3日（1869年1月15日）禁錮5年を言い渡されるが、翌明治2年10月刑を免除され²³⁾、その後維新政府の中樞へと昇ってゆく。関直彦の和歌山時代の漢学の師にして、法典調査会の最長老として議長も務めた三浦安である。

【外伝⑫】

坂本龍馬と 現行民法典の 起草者たち



2010年1月復元された「平成いろは丸」(市営渡船として瀬町・仙酔島間を運航)¹⁹⁾

19) [写真出典] 福山市役所ホームページ (<http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/life/detail.php?hdnKey=5956>)。

20) 『南紀徳川史（第4冊）』（南紀徳川史刊行会、1931年）133頁以下。他の記事と比較して異常な記述量である。

21) 前掲注20)『南紀徳川史（第4冊）』345頁。これに対して、司馬遼太郎「花屋町の襲撃」「幕末」（文春文庫、2001年新装版）140頁では、「新撰組側は、さすがにこういうことに場馴れしていて、すばやく灯りを消し、『三浦、討ちとった』と、隊士の一人が叫んだ」との設定になっている。今日ではマイナーな三浦の機転とするより新撰組を主役にしたほうが、小説の読者は喜ぶだろう。

22) 関・前掲注17) 343～344頁。

23) 前掲注20)『南紀徳川史（第4巻）』481頁、520頁、592頁。